

曇天のままにわが町暮れかぬる

舞ひあがれ大陸間を春の塵

死ぬ時は後腐れなく石鹼玉

細く長く小枝の春となりにつけり

霧に似て霧より明し春の塵

人の世に丸々浮いて石鹼玉

啓蟄や鉛筆は身を削られて

大陸の塵よ埃よ春の風

石鹼玉うそとまことのあはひかな

お彼岸の墓も喜ぶ上天気

飛ぶものの飛ばぬ一日春疾風

石鹼玉レンズの結ぶ虚像かな

春なれや空にきらきら塵ほこり

明け方の春一番と知られけり

石鹼玉絵空事とは美しや

み仏もまた春塵の如きもの

逝くならば天国が良し石鹼玉

石鹼玉虚実皮膜の割れ易き

み仏や舞ひ上りたる春の塵

きのふまで生きてゐし人石鹼玉

東の間を夢みて遊べ石鹼玉

春塵に天文台の丸き屋根

しやぼん玉わつて天使の遊ぶなり

天国へ一度はおいで石鹼玉

春塵の舞ふや十年一昔

べたべたに空を濡らして石鹼玉

吐く息を丸く収めて石鹼玉

春塵は地球に地球儀の上に

雨粒の百千倍や石鹼玉

暖かな雨にもうすぐ雛祭

雪とけて村いつぱいの春の塵

近づくは壁の引力石鹼玉

囀や連休中日よく晴れて

大陸の塵を運ぶよ春の風

子が吹けば風が追ひかけ石鹼玉

猫の子の握り潰されさうな顔

菜の花の近くの空気甘からむ

石鯨玉人海戦術にも似たり

公魚と氷の穴に垂れし糸

走るなど言へば走りぬ花吹雪

夢中なり夢の中なる石鯨玉

公魚の若き命を炙るなり

春塵に巻かれ発掘調査隊

クローバー狭庭に咲けば踏まれやす

公魚は売られ柳は芽吹きけり

ある朝は花菜の卓でバナナ食ふ

黄塵の国に果てたる遣唐使

公魚は氷の闇に産卵す

地獄には割ることなき石鯨玉

黄塵は風を呼び寄せ海を越え

公魚を炙る氷が少し解け

黄塵のちりぬる国の黄河かな

亀よ鳴け降る春塵は山をなせ

黄塵は空へ黄河は海へかな

ぱたぱたと春の埃を象の耳

海を来る大陸発の春の塵

春塵や一晩で越す日本海

大陸を日本の海を春の塵

菜の花の花は黄色に葉は緑

日本海をひとつ飛びなる春の塵

菜の花の蕾奥歯にぎゅつと噛む

馬の背の右に左に春の塵

公魚の氷上氷下死と生と

住む世界違ふ風船石鯨玉

公魚や氷の穴を出てみれば

飛石は空を飛ばねど地に涼し

薫風や空飛ぶものに地のものに

激流を撫でたる鮎の竿といふ

庭を掃くことも修行や僧涼し

ハイウェイを屋根なき車風薫る

したじきを団扇代りにぱたぱたと

つかまつて或る日涼しく立ち上がる

ひとり居の窓を開ければ風薫る

壇 打水もなし天竺へ続く道

大粒の人造ダイヤ涼しけれ

稿成りて推敲の山風薫る

思ひ出すこの草笛の草の味

歳月の吹き抜けゆくや墓地涼し

夏空にアンテナを立て企みぬ

草笛や軍楽隊に憧れて

涼しさや白地に青くPの文字

もくもくと雲の巨魁や夏の空

草笛やまだ赤んべのベーの音

一も一字十も一字の涼しさよ

もくもくと雲の巨体や夏の空

草笛を捨てて帰りし夜の風

涼しさと寝るは極楽一丁目

も雲くと巨大な雲や夏の空

飽き足らず草笛の子の歩き出す

涼しさに二本の足を投げ出して

炎天の線路は長く釘付けに

壇 昼寝して昼を愛づる手足かな

一字にて足る一、十、百、千、万涼し

炎天の以下省略の句なりけり

壇 百千の蟬の励ます夏期講座

じだらくに寝たる宗次の涼しさよ

植田風低く遍く柔らかく

汗の手で書きし昔や夏見舞

涼しさは水尾か水輪か漣か

植田から青田に変わる日数かな

もう一度午後のプールに来たといふ

ぱたぱたとロングスカート涼しさう

何となく歩いてをるは植田守

小学校プールこまごま賑はへり

薫風や幼き苗を励まして

風神も子連れで憩ふ植田かな

冷たさの夜のビニールプールなり

薫風が海へ山へと誘へり

客車から機関車が見ゆ植田越し

少しづつ今日の水足すプールかな

薫風に柱を立てて家造り

植糸し田にほほゑむやうに風がふく

水を溜めさして工夫もなきプール

薫風に誘はれて来し山の宿

壇 汗かかぬ齡さびしと句に記す

生徒去りプールの水の少し減る

驟雨なりプールの水を増やすほど	ひらかれて穴子に表と裏が出来	香水を蛇のとぐろに滴らす
プールの水で峰雲いくつ作れるか	緑濃き山の激流鮎の川	蛇長くなかなか細くならざりし
プールサイドに籬の外れし男女の腹	鮎の瀬に山椒魚もをるといふ	丸呑みの蛇の味覚を哀れとも
プールなり水があらうと無からうと	鮎を焼くけむり銀座のネオン街	蛇泳ぐまさかこちらへ来ようとは
海山に負けずプールを開くなり	働いて終る一生蟻の道	行き来する彼岸此岸や蛇泳ぐ
今日開くプール真水の夜明けなり	蟻の巢の真つ暗闇に眠るなり	メデューサの蛇の吐き出す二枚舌
大海に浮ぶプールや船の旅	この部屋に動く金魚と掛時計	蛇の尾の少し細くて平凡な
水入れてプール重たくなりにつけり	温泉の宿の離れに棲める金魚かな	朽繩を蛇と化したる神意かな
室内にすつぽり入るプールなり	二三日金魚のゐない金魚鉢	するすると蛇の道を行く蛇長し
プールとは水を注ぎ足し注ぎ足して	雨ふりを知らぬ金魚が水の中	代々の青大将がこの家守る
なんとなく首をすくめて茅の輪かな	蜘蛛の巣も蜘蛛も重たし雨の中	ふる雨に水温変る目高かな
墨染の袂の如き揚羽蝶	でで虫になれぬ一生なめくぢり	危きは目高の群の最後尾
長子と言はぬ穴子の長さかな	ゼリーより硬き弾力蛞蝓	学校を抜けて目高の学校へ
群れてゐる穴子の穴やあなをか	雲死して生れ変りぬ蛞蝓	壇子子も食つて元気な目高の子
釣人や穴子釣れねど色々	蛞蝓のあと肉筆と言ふべかり	壇背を裂いてまだ白色の油蟬
ぬらぬらと蛸も穴子も商へり	肉筆や蛞蝓の這ふ銀の跡	壇 空蟬と博物館の大鎧
レジ横に刎ねし穴子の頭売る	音がして青大将のどたと落つ	絶命は絶対の蟬時雨なり

油蟬に油の艶はなかりけり

水田に落ちて溺るる蟬もあらむ

蟬時雨電池切れたるものは落つ

万緑を縦横に切る緯度経度

万緑の地下に万根しづかなり

万緑の中ハンカチの落し物

万緑の肌を削る鉄の爪

万緑の中のヘアピンカーブかな

万緑の地下に土食ふ蚯蚓かな

仮説また仮説を重ね濃紫陽花

桑の実が洋風の名で売られをる

桑の実はマルベリーとや面映ゆし

金銀に遠きやすらぎ花はちす